

千里山会との20年

二十七回生 萩原 直夫

一. 『千里山会』との出会い

1996年のある日、突然我が家に柿崎さんと名乗る見ず知らずの方から電話がありました。

「昔、千里山に住んでおりました柿崎と申します」に始まり、東京に千里第二小学校の同窓会組織があり、2年ほど前から総会・懇親会を催しているとのことでした。さらに、今年は11月16日、銀座の「あしべ」で開催するので出席して欲しい、同級生等にも連絡して欲しいと続きました。

それにしても、どのように私如き者の電話番号を調べられたのか、不思議に思いましたが、その後、柿崎さんを中心とした千里山に熱い思いを抱かれている方々の多さ、行動力、組織力を知ると、別段不思議でも何でもないことが分かりました。

ただ、その時、柿崎さんのお名前を聞いただけでは、皆目

見当もつきませんでした。当然です。お歳は私より13年も上で、当時のご実家の場所も、極端に言ううと、西の端（柿崎さんのご実家）と北の端（我が家）。

私には3人の姉がおり、一番上は7つ上ですが、それでも柿崎さんよりは6つ下。これでは重なるところがありません。唯一の接点は、その姉が高校時代、小川さんという当時京大の学生さんに勉強を教えてもらっていました。この小川さんが柿崎さんの家の近くであり、柿崎さんは小川さんご自身か、そのお兄さん当りと年齢が近いかなと思われました。現に柿崎さんに伺ってみると、お名前はご存知でした。

実はこの小川さんの名は、後日、千二小の先輩と偶然に出合った時のキーワードとなりましたが、それは後述します。

ともかくよく解らないまま先の『同窓会』に出席すべく銀座 あしべへ出向きました。その時の第一印象は、

* 私よりかなり年配の方が圧倒的に多く、我々は鼻たれ小僧か？と思うほど。昭和一桁生まれが中心。

* それでいながら同級生は意外と多く、その情報網の緻密

さに脱帽しました。

* こんな状況なので、それほど楽しいわけはなく、懐かしいとどの感傷も・・・総会終了後、同期だけで喫茶店に寄り、改めて旧交を温めました。

二. 私自身の20時代

千里山会と私の20年に言及する前に、もう少し遡った頃よりの私自身について語らせて下さい。

1994年3月、86歳を前にして父が亡くなりました。最後の3か月は入院生活だったものの、世話がかかるようになっての2年間は、千里山の自宅で母や2人の姉の介護を受けて暮らしていました。半世紀を超える千里山での終焉です。

神田生まれ・育ちである母も、父との結婚で大阪に来て、6年間ほど小浜の方に住んだ後、昭和17年に千里山へ。以来ずっと千里山生活が続いたのです。ただ、父の介護に疲れ切っていたのと、私の家族以外に東京方面には当時まだ2人の実姉が健在だったこともあり、千葉の我が家で一緒に暮らすことになりました。移ってきたのは父の死の1年後、19

95年です。

そしてその翌年、先の柿崎さんからの千二小同窓会へのお誘いと繋がるのです。更に私事ですが、長男の就職（95）、長女の就職（98）（共に私の力）、長男の結婚（98）、次男の大学進学（共に私と無関係）と続き、私の韓国4年間の勤務が決まりました。（99〜03）

プレ千里山会―第1回千里山会、第2回千里山会に出席し、それなりにお手伝い（受付や、案内係）をさせて頂いていました。それもここまで。

この様な年になってからの親との同居、それも私は嫁に任せて海外へ。如何にいい加減な私でも、心に忤怩たる思いでした。でも心を鬼にして日本海を飛び越え韓国へ。

その年（99）と次の年（00）は、千里山会を欠席。しかし3年目、4年目は千里山会に併せて一時帰国しました。千里山会は今もそうですが、1年も前に開催日を決めています。だから私の半年に1回の一時帰国は、千里山会の開催日に合わせたのです。

韓国赴任中の後半に娘の婚約・結婚、続いて韓国からの帰

任と同時に私の定年退職が迫るので、自身の再就職活動が必要となつて来ました。

03年、無事に帰任。そして1か月後、還暦を迎え定年退職、元居た会社の子会社への転籍と続きます。

そして、その前後から私の身近な方々との別れが始まりました。02年から04年の3年間が、それに当たります。

伯母、義父、母、娘婿の父親、義兄、千二小の同級生(当時、千里山在、千二小同級生のご主人、私が会社で最も影響を受けた兄貴分のお2人、ちなみに義父、母、伯母、義兄以外は全て60代で亡くなりました。

娘婿の父親は吹田市出身で、茨高、阪大工学部一住金だったので、奥田さんにも存知でした。母親の方は私と同じ年で、高校―大学と大阪音大で、延原武春氏と同級生です。

03年に韓国より帰国以降は、千里山会の学年幹事として、総会の準備、下働き、司会等、お手伝いさせていただき、今日に至っております。

三、千里山の力、千里山会の力

* 人材の宝庫

先にも言いましたように会誌11号より私が編集責任者です。10号までは、何といつても強力な『千里山開発物語』が連載されていきました。しかしそれも既に終わり、目玉作品がありません。市川歌右衛門、片岡千恵蔵、中村錦之助、大川橋蔵抜きで忠臣蔵の映画を作るようなもの。

いやいや、歌右衛門も錦之助もいました。さすが千里山です。黒川高秀さん、南部敦子さんを語って下さった方がおり、そして懐かしい千里山線の電車の数々を紹介して下さいました。方々もおられました。千恵蔵、橋蔵もいました。それが東谷勝司先生であり、また勝司先生が紹介して下さいました18回生木谷彰良さんです。会誌17号の『長靴をはいたナオちゃん』にも書きましたが、幼い頃の思い出・疑問『千里山中学』について明解に答えて下さったのがこのお二人です。会誌14号『千里山に私立中学校旧制があった』です。

会誌そのものが千里山の力です。

会誌については、第11号より柿崎さんに代わり、私が編集責任者として(その実、多くを奥田さんに助けられ)、ともかく続けているのは皆様よく存じの通りです。10号以前でも、会誌が出来上がり、皆さんのお宅に届けるために小川町郵便局に数人が呼び集められ、封筒詰めをさせられたのも懐かしい思い出です。

何号でしたか。我々4〜5人が集まってその作業に入ろうと思つたら、何と出来上がつてきた会誌の中身がひどいもので(頁が跳び、用紙が逆さまと言つた、即やり直しを指示。なんてこともあり、おまけに製作費が高く、翌年から千三二回生、伊藤千恵さんのご協力のもと、教社から見積もりを取り、製本業者を変えました。

10年に大会社勤務も辞め、毎日が日曜日に。その8か月後に起きたのが、東日本大震災。これ以来、私の人生はボランティア三昧の生活となりました。

* 私が千二小で生徒を前に挨拶? .. 千里山会の力

09年11月14日(日)、千里第一小学校で創立80周年記念式典が開催されました。この式典については1年も前から知つていましたので、式典父兄席の隅っこにでも場所をお借りして、会誌に紹介するため取材をさせて欲しい旨を前もって知らせ、校長先生にお許しを得ていました。

ところが式典の1ヶ月前に、当日は高学年全生徒の前で挨拶をして欲しいと打診がありました。通常、母校を訪問し挨拶などするのをTVなどで観るのは、オリンピック・メダリストをはじめとした著名人・有名人ばかり。私のような一介のしょぼくれ爺など聞いたこともありません。

これだけ地元では、「東京の方には『千里山会』と言う、千二小卒業生の同窓会があり、会員数は数百人、総会出席者も百人を超える盛大なものだ」と伝わっているのです。

勿論、嘘ではありませんが。

それにしてもお尻が落ち着かず・・・控室では衆議院選挙当選7回の33回生藤村修さんも大きな真赤な花を胸につけておられました。挨拶はなし。私も紹介して頂き、その時

は先輩・後輩の関係。この記事をまとめた翌年には立場は大きく逆転。私には雲の上の方になられていました。

四 千里山会で知り合った方々

千里山会に毎回出席し、真つ先に声を掛けて下さったのは、同級生は元より、3人の姉のお友達。昔近所にお住まいだった方やよく遊んでもらった方、母親同士が千里山で親しく、その意味では昔からよく知っていた方々、私の同級生のお姉さんと実に多彩でした。

* 3人の姉(20回生(22)(24)のお友達

一番上の姉では、三笠(現禪山)さんと藤川(現井出)さんです。三笠さんからは、毎回総会時、「アంతタ、また飲み過ぎてるんちゃう?」とお叱りを受けていますが、まさに凶星です。

藤川家とは母親同士が親しく且つ、藤川家と我が家は、男女の違いはともかく、4人兄弟の歳が皆一緒です。

同じような関係にあるのが、坂田家、林家(裕二さん)で

す。千里山の特徴の一つに、引越してこられる方の年齢に幾つかの波があり、親の歳が近いことと、これは千里山だけのことではありませんが、当時は子供の数が多く、4〜5人は当たり前だったことがあります。

二番目の姉では尾川原さんであり、三番目の姉の場合は、五十嵐(現河合)さんですが、同時に私と同級生五十嵐君のお姉さんでもありました。

* 「近所にお住まいだった方

千里山会でしかお会いしたことがないのが10回生徳田逸夫さんで、我が家とは道を挟んで二軒上でした。但し、柿崎さんよりも更に4歳も上。私と同級生にゴロウ君という弟がおり、一時期大の仲良しで、毎日のように一緒に遊んでいました。彼だつて日頃、お兄さんはみたことではないのでは? 我々が物心つく頃はほとんど外国航路船に乗っておられたのですから。ある総会時にゴロウ君の詳細を尋ねると、いきなり号泣され、「よくぞ聞いてくれた。しかし亡くなった」と言われた時のショックは忘れられません。

19回生西脇恒子(現馬場)さんも実家は斜め違い。恒子さんの弟マサアキ(私はいつもマーちゃんと呼んでいた・26)さんもゴロウ君同様、一年年上でしたが、よく遊んでもらったものです。マーちゃんももう亡くなっており、千里山の西脇さんのご実家はマーちゃんの遺族がお住まいです。もう10年以上前になりますが、千里山会員の恒子さんより電話を頂き、1時間ほどお話を伺ったことがあります。

* 26回生 永井誠さんとの劇的?な出会い

近所と言えば、公民館を背にして我が家の2軒手前に、兄弟姉妹皆さんが秀才揃いの岡田家があります。私が一番よく遊んでもらったのは、25回生岡田恵治さんですが、一緒に中村孝士さん、永井誠さんがおられます。

この永井さんとの50年振りの再会は何とも不思議なものでした。何しろ、お互い顔も名字も全く覚えていなかったのですから。

私は最初の会社の子会社の一社員、永井さんもその当時は商社丸紅の関連会社の社長から顧問に変わられたことで、私

の所属する子会社に挨拶に見えました。永井さんの自己紹介の中に、京大―丸紅―バスケットのキーワード。まさか吹田、千里山などまだ頭にはないまま、先の小川さんの話をしましたすると・・・オーオーと次々氷が溶けるように・・・そして極め付けが、永井さんの次の一言
「そう言えば、ナオボンちゅう男の子がおったナ」
思わず「それが私です」と答えています。
以来、千里山会総会には必ず出席して頂いております。何しろそれ以前は、25回生の出席は山崎(現牧村)佳那子さんぐらいと非常に低い出席率。でも今は、中村孝士さんも加わって賑やかになりました。

* 祖父・父・私を覚えていて下さった13回生仲辻章さん

何回目かの総会に大阪から仲辻さんが出席してくださいました。懇親会も中頃、学年単位の席もかなり乱れてきたころ、「萩原さん、あなたの東京のお爺さんをよく覚えてるよ。お父さんね」と言われた時には・・・私の記憶が残る頃には、仲辻さんは大人の仲間入りをされていたのですか

ら・・・

母方の祖父はその頃、70代で、根っからの江戸っ子です。時折、1ヶ月ぐらゐの滞在期間で千里山の我が家に来ていました。よれよれの着物・ゲタを履き、駅の方まで散歩をし、仲辻さんの所で牛乳を飲んで帰ってきていたのです。

父の方は、まあ娯楽の少なかつた当時、大人同士の運動会などもあり、当時の会社の陸上選手だつた父は、夢中になつて梅田の三ちゃん（としか私は覚えていませんが、明大野球部出身で千里山でもスターだつたそうです）に勝つて、相手を相当悔しがらせた、と聞いています。

* 印象に残る18回生 白鳥選手様 妹様

右も左もよく解らない千里山会にあつて、飯島 柿崎先輩たちに混ざつて美人、かつテキパキと動かれて輝かれていたのが白鳥先輩です。

早目に会場である『銀座 あしべ』に出向き、受付のお手伝いをしていると、颯爽と現れ一言、

「絶対にお釣りを間違えちゃダメよ」。そう告げると踵を

返し去る方へ。

「なんや あれは？」 「冗談ぢやうで。我々、ボランティアでやつてんねんで。じゃ、多く間違えたら山分けか？ 足らなんだら、出席者が一人少なかったことにしたらええやん」と私は呟いた。

「何言つてんの！ 足らなかつたら我々で弁償よ」とは、受付先輩のお姉さまたちでした。

ともかく受付を終え、我が学年のテーブルへ。そこで仲間、一部始終を話し、「全く、怖いおぼちゃんやで」と言つと、お隣のテーブルの女性が、「ネー！ 解る？ 私の長年の苦労が」と言つてくれました。

「エ？」とその女性の胸に貼られた名札を見ると「高橋尚子 旧姓 白鳥」とありました。

その後、白鳥選手さんは亡くなつたと聞き驚きました。千里山会創設の大立役者のお一人と聞きました。

体調を崩されたのか、妹さんもその後、会に出てこれなくなつて久しく淋しい思ひです。

おわり